

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	高中時代 : 明治二十年より明治廿七年まで
Author(s)	五高創立七十周年記念会; 高森, 良人
Citation	龍南への郷愁: 14-40
Issue date	1957-10-10
Type	Book
URL	http://hdl.handle.net/2298/10841
Right	

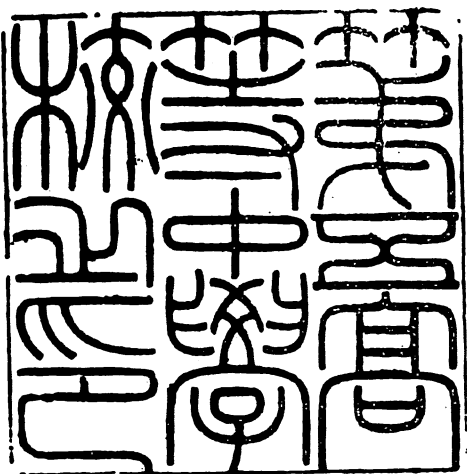
二、高中時代

明治二十年より
明治廿七年まで

古城の二年

明治二十年六月四日付を以て、第一高等中學校長兼東京高等師範學校幹事から、本校に轉任を命ぜられた野村校長は、會計出張員井上文部屬を伴うて、同月二十一日着熊、櫻井町十七番地の内國通運會社に止宿し、七月十三日を以て、同所に假事務所を設けた。かくて、新築落成まで、凡そ二年間の假校舎を、何處にか物色しなければならなかつた。偶々、古城の陸軍所轄地に在つた熊本縣警察署が、（現在の北警察署）南千反畑町に移轉したその跡を見出し得たことは、洵に此の上もない仕合せであつた。由來、古城は、加藤清正が熊本城を築くまで、歷代の居城に當てられ、豊臣秀吉の薩摩征伐の途次にも、此處に滞在したことがあると傳へられて居る。降つて明治の初年には、熊本醫學校及熊本洋學校の所在地でもあつた。故に、此の地は、單に熊本に於ける文武二道の遺跡であるばかりでなく、實に、新文明發祥の地とも稱し得る處で、熊本醫學校廢校の後には、熊本縣警察署が置かれて居たのである。

斯くの如くにして、第五高等學校は設立されたものの、施設や内容など、具體的には、悉く創始されなければならない。且又、生徒の入學に關する諸件や、學科程度等に就いても、關係各縣内の尋常中學校とも、聯絡統一する必要がある。そこで、各縣知事の同意を得て、熊本縣醫學校長・同附屬病院院長の外、各縣の尋常中學校長、學務員、縣會常置委員など、二十數名の參集を要め、二十年八月八日の午前八時より、櫻井町の假事務所の階上に於て、相談會を開き、學科、程度、



教科書、授業料、寄宿舎の食費、第一回生徒募集人員、科目の順序、新校の場所、外國語、敬禮法等、萬般に互つて、各方面の意見を聞いて居る。而して第一回募集人員の八十名も、此の時、學校側から提案して、附議決定されたものである。

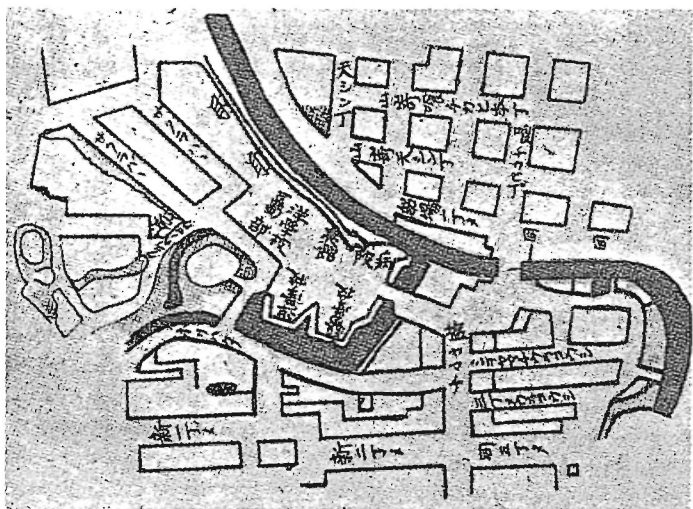
既にして、熊本鎮臺との交渉契約も済み、十月一日を以て、いよいよ同地に假事務所を移し、開校の準備にかかり、十月中にも授業開始の豫定であつたが、その實、十一月十四日に、豫科三級合格者二十四名並に假入學者六十一名に對して、入學式を舉行したのは、考查に相當の時日を費したのと、十月四日、三百圓—今の約六十萬圓—の校舎修繕費、同月六日、避雷柱買入費が支給されて居るやうに、修理や増設等の必要があつたからである。

◇ — ◇

第五高等中學校一覽(明治二十年)第三章總則第二條には、

本校ノ學科ハ、本科豫科ニ分チ、本科ハ、明治十九年文部省令第十六號高等中學校ノ學科及程度ニ據リ、豫科ハ、同年同令第十四號尋常中學校第三年以上ノ學科及程度ニ據ル、

但、當分ノ内、豫科補充ニケ級ヲ置キ、明治十九年文部省令第



明治初年の古城略図

十四號尋常中學校第二等級以下ノ學科及其程度ニ據ル、

とあり、又、第四章學科課程第一條には、

本科ノ課程ヲ二學級ニ分チ、豫科ノ課程ヲ三學級ニ分チ、各一學年ヲ以テ一學級ヲ終ハル、

とあり、第六章入學在學退學規定第二條には、

入學ヲ許スベキ者ノ年齢ハ、豫科第三級ニ於テハ、滿十四年以上トシ、同第二級ニ於テハ、滿十五年以上トス、其他之ニ準ズ、

とあり、更に、第三條には、

本科第一年級ニ入學セント欲スル者ニハ、尋常中學校第五年級以下、豫科第三級ニ入學セント欲スル者ニハ、尋常中學校第二年級以下ノ學科及其程度ニ依リ、學力試業及体格検査ヲ受ケシム、

とあるやうに、豫科第三級の入學試験程度は、尋常中學校第二級以下の學科及程度に據ることとなつて居る。然るに、文部省第十六年報（明治二十二年分）にも、

本年尋常中學校ノ卒業生ハ、僅ニ二百八十一名ニシテ、猶ホ其ノ四分ノ一ニ足ラズ、蓋シ、尋常中學校ノ卒業生ハ、直ニ高等中學校ノ本科ニ入ルヲ得ベキモノナレドモ、現今ノ卒業生ハ、其ノ學力未ダ足ラズシテ、直ニ本科ニ入ル能ハザルノミナラズ、其ノ豫科ニダモ猶ホ入ルニ堪ヘザルモノアリ、現ニ、地方ノ卒業生ニ就キテ之ヲ觀レバ、其ノ豫科ニ入ルヲ得ルモノハ、十分ノ一二ニ過ギズ、

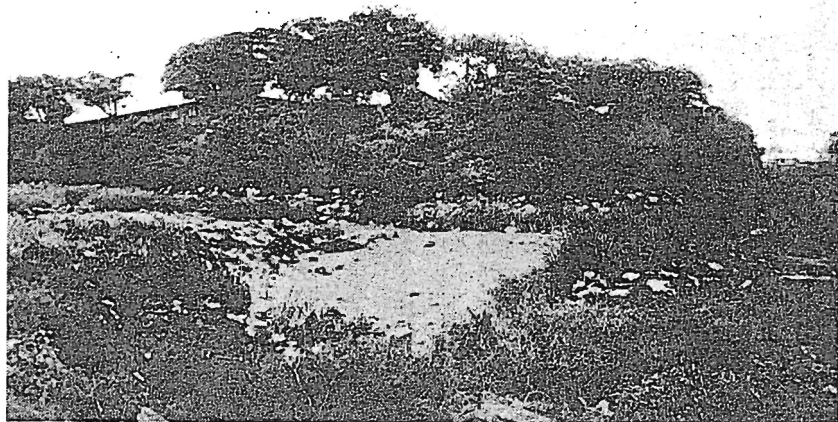
とあり、又、同報の高等中學校の條にも、

第一高等中學校ヲ除ク外ハ、地方ノ生徒ニシテ、直ニ豫科ニ入ルヲ得ベキモノ甚ダ乏キガ故ニ、別ニ豫科補充生ナルモノヲ置キ、第三高等中學校ハ、其ノ課程ヲ一年トシ、其ノ他ハ、之ヲ二年トシ、豫科ニ入ルベキノ地ヲナサシム、

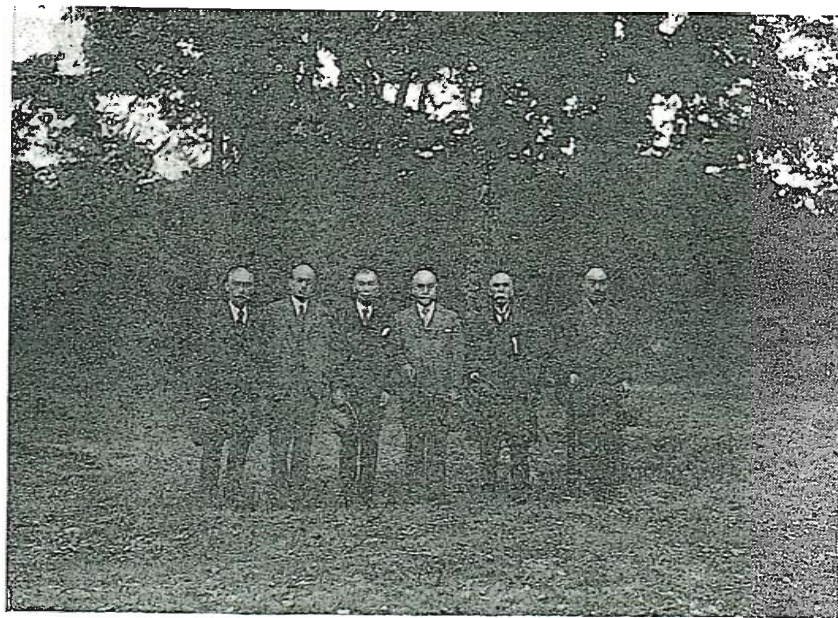
とあるやうに、第一を除き、第三には一年の豫科補充を、第二、第四、第五には、二年の豫科補充を設けたほども、學力不足のために、考査も規定通りに行ふわけにゆかず、随分骨の折れたことが察せられる。

右に就いて、『生徒入學概況申報』を見るに、八月十三日を以て、生徒募集のことを官報及各種新聞に掲載し、八月二十日より、九月二十日までの間に、出願すべき旨を廣告し、熊本・大分・福岡・佐賀・長崎・宮崎・鹿児島の七縣學務課及尋常中學校にもその旨を通知し、出願者に對しては、一回の通檢だけでは、その學力を査定し難いので、普通試験法の外、特に復習・訓練等、種種の方法を混へ、數週間を期して覆審検査を遂げ、然る後、各自の實力を差別すべき見込に付、從來學習した書籍など、なるべく携帶の上、數週間滞在のつもりで出校するやうに、と通示したのである。

かくして、十月六日、入學試験委員心得、受験者心得、入學志願者特別檢定心得等を定め、十五日、入學志願者を集めて、試業中の準備などを示し、十八日より二十四日まで、一週間に互つて、倫理・國語漢文・第一外國語・地理・歴史・數學・博物・物理及化學・圖畫・體操等の諸科目に就いて考査を施し、十月二十七日より十一月十五日までの十日間に、國語・數學・地理について、特に覆審検査を施し、體操は、特別檢定の主意に基づいて、駢足早駢等の耐否、呼吸の緩急等を試み、十二月十日より十二日までの三日間、受験者百八名に對して、嚴密な身體検査を行った結果、二十四名の及第者と、六十一名の假入學者を發表したのである。而してその假入學と云ふのは、試験の成績は、大體に於て、豫科三級入學程度に該當するけれども、一二學科に短所があるので、將來、數箇月間を期して、之が補修を施し、漸次、豫科三級に編入せしめ得べき見込ある者である。かくて、入學式に參列したのは、豫科三級生二十四名と、假入學生五十八名―三名は辭退―であり、式後、引續いて授業を始めたのである。



古城（昭和十二年）



古城時代を偲びて（昭和十二年十月十一日）

（左より）隈本繁吉・長野忠次・古森幹枝・赤星典太・藤本充安・片山貞松（の諸氏）
（第三回卒）（中退・特）（第二回卒）（第二回卒）（第一回卒）（第四回卒）

當時に於ける本校部職員は、野村校長・大橋（太郎）幹事の外、之を任命順に挙げると、書記永井孝一、備園哲雄、教諭理學士高須碌郎、助教諭秋山鍊太郎、教諭利根川浩、同福井彦次郎、舎監飯田秀魁、書記志水源吾、講師小川忠武、囑託川上親晴、同古賀富次郎、當分雇矢野熊彦の諸氏に過ぎなかったが、衛生醫退職一等軍醫奥村一隆、英語科助手余田志馬人、囑託石井將之、同豫備役上等兵川野房吉の諸氏が、その年に加はり、翌二十一年には、書記三浦造酒藏、教諭工學士中原淳藏、雇井田幸男、助手福島綱雄、雇町野一清、教諭笠井直、同小出壽之太、同笠間益三、同中川久知、囑託成富信敬、助教諭前野關一郎、雇生駒新太郎、外國教師英人イーバル・クラミ、教諭（教頭）西邨貞、教諭賀來熊次郎、囑託永沼貫平、教諭前田元敏の諸氏が加はり、二十二年七月の假移轉までに、書記肝屬兼寛、囑託今井恆郎、助教諭菅沼安隆の諸氏が加はって、各科の陣容も、次第に整つて來たのである。

◇ ◇ ◇

然るに、文部省は、明治二十年十二月二十八日、告示第十五號を以て、高等中學校豫科生徒の人数が不足する場合には、當分の間その補充生を入學さしても差支へない旨の通牒を出したので、本校に於ては、二十一年一月、生徒募集の廣告を出し、三月十九日より豫科第三級の入學試業を施行し、その結果、豫科三級二十二名、補充二級二十九名を加へ、五月には、補充科志願者三百五十四人中、同一級に九十二名、同二級に十六名を許可し、更に七月には、豫科二級志願者十三名中、同三級に一名、補充一級に一名を許可し、補充二級出願者四十四名中、同一級に十九名を許可し、同一級出願者百四名中、十三名を許可し、九月には、出願者百七十名中、三名を豫科三級に、五名を補充一級に、三十三名を同二級に許可するといふやうに、次第に生徒の數を増して來た。一方又、二十年十一月以降、主として月額一圓の授業料、その他の學資不足の理由で、七十餘名の退學者もあつたが、二十一年十二月末日現在では、豫科二級十五人、同三級八十三名、補充

110

—◆—◆—

—◆—◆—

文部省は、二十一年七月六日、省令第四號を以て、高等中學校の學科を、一部（法科、文科）、二部（工科、理科）、三部（醫科）に分ち、生徒をして各その一つを修めさせることにしたが、當時、三部を置いてあるのは、第一高等中學校だけで、本校の如きは、同年十二月二十八日に至つて、漸やく規則を定め、右表の通り、本科には一人も居らず、従つて、部の區別すらなかつたからである。

—◆—◆—

と、祝賀畢式の深義を、率直明快に吐露する所があつた。而して卑屈病脱却云々の語に至つては、野村校長の面目躍如たるものがあるのである。

高中時代

鎮臺から来た三人の器械體操の妙技供覧を以て、生徒一同退散、來賓には第一教場に於て、二次會が開かれて居る。

同年十月十日の入學式も、文部省専門學務局次長杉浦重剛を始めとして、九州各縣の學務課長、公・私立尋常中學校長並に教員、縣會定置委員等、多數の來賓を迎へて、豫科三級生三名、補充一級生二十一名、同二級生百八十名に對して、盛大に行はれたことが、十月十九日の官報に載つて居る。而してその日に於ける野村校長の「入學諸子ニ示ス」の一文もさることながら、時間の都合によつて割愛されたので、十三日付を以て、百八十部の「印刷許可何書」を本省宛提出した、當年三十二歳（安政元（1854）年生、明治三十九年卒、年五十三）の俊英、私立濟々饗校長「佐々友房ノ演述」の草稿を一讀すると、眞に剴切的當の感を深うするものがある。今、その一部を引用すれば、

終ニ臨テ、猶一言諸君ニ望ム事アリ、諸君ハ、九州人士ニアラズヤ、九州人士ガ精神氣力ニ富ムハ、殆ド特有ノ性質トモ云フベキモノニシテ、天下輿論ノ公認スルトコロナルガ、長アレバ茲ニ短アリ、一得アレバ一失アルモノニテ、九州人士ハ、大概放疎豪逸ノ氣ニ富テ、精細緻密ノ思想ニ乏シク、今日ノ時勢ニ際シテハ、甚ダ不適當ヲ覺ユルナリ、今之ヲ救フノ道ハ他ナシ、孰レモ云フ如ク、理化學思想ヲ養成スルニ若カザルナリ、而シテ九州人士ノ特有タル精神氣力ノ本色ヲ、失墜セザラン事ヲ勉メザル可カラザルナリ、野村校長が赴任サルル前、予ガ東京ニ面セシ時、野村君曰ク、予ハ、東京ニテハ體育家ノ聞アレドモ、九州ニ赴カバ、成ルベク理學思想ヲ養成スル管ナリト、誠ニ至當ノ議論ト云フベキナリ、諸君九州人士ハ、堅忍剛毅ノ氣象ヲ特有スルモノナリ、此氣象ヤ、各種ノ事業ヲ達成スル原動力トナルモノニシテ、彼ノ精細緻密ノ思想トハ、決シテ相衝突スルモノニアラズ、否、相須テ完全ノ働キヲ爲スモノナレバ、諸君ハ、願ハク（ハ）此氣象ト彼ノ思想トヲ混和調合シテ、鞏固確乎タル萬事ノ大基礎ヲ築カン事ヲ、云云

信に至論知言と謂ふべきである。會ては體操傳習所長として、東部に嘖嘖たる野村校長と、當時本縣教育界の重鎮にして、後年政界の雄たる佐佐饗長とは、意氣投合する所があつたに相違ない。而してその演述の中に、

各地ニ高等中學ヲ設立セラレシ如キハ、蓋シ、大臣ノ深キ考アルコトニテ、向後同校ノ發達ト共ニ、數年ヲ出デスシテ、學問上ニ都鄙別ナキニ至ルハ甚明白ニシテ、遂ニハ全國ニ五大學ノ設ケアルヲ見ルヤ、亦遠キニアラザルベシ、とあるやうに、熊本の地が、將來國立大學設置の處たるべき充分の見込があつたことは、一高等中學としては、餘りに廣大なる地域を定めた一事でも察せられるであらう。

創業即下の古城時代には、學校當事者と在校生諸氏とが、和衷協同して如何ばかり校風の樹立に熱心であつた事や、その外記すべきことも少くないが、大抵は五十年史に譲り、特にその名目だけを擧げて置きたいことが二つある。その一つは、動的方面の「第五高等中學校體育會」の成立で、他の一つは、靜的方面の「第五高等中學校姿勢標準」である。而してそれ等は、野村校長が、夙に運動家を以て聞え、會ては體操傳習所長でもあり、保健衛生に就いて、非常な關心があつたからである。

註

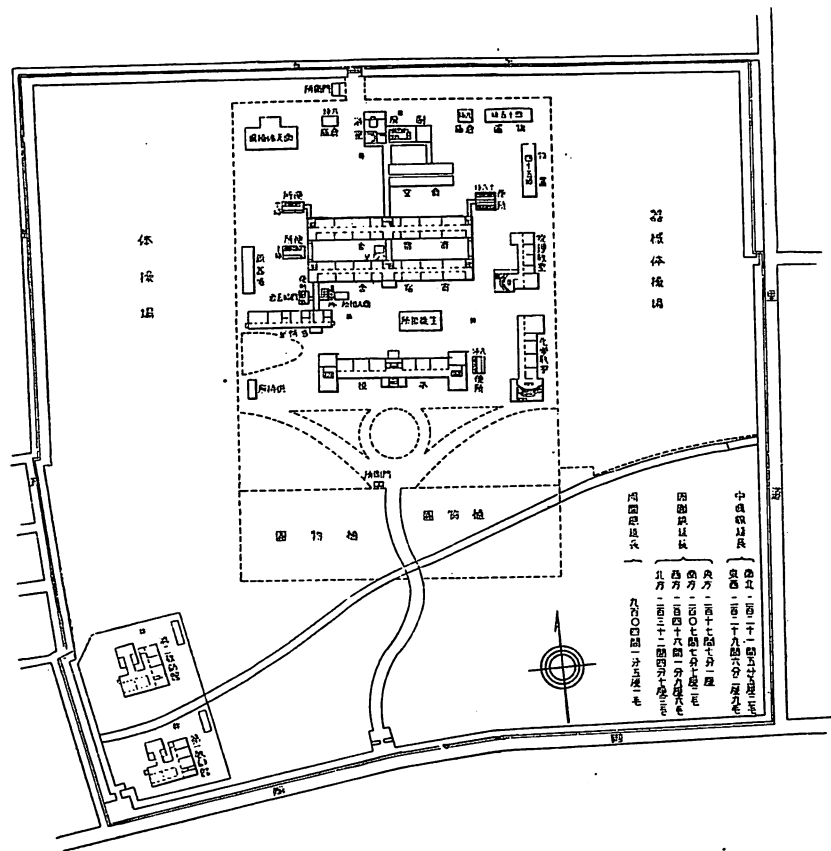
創立の頃までは高等官畜馬の名残で校長も教頭も皆、馬を飼つてゐた。その際學校では乗馬三頭、馬丁一人を置いて、これに校長の馬と、教官の馬と都合五頭を素鞍のまま、山崎練兵場に牽き出し、各組五人宛交代に、乗馬の猛訓練を實施され、馬術の進むに従ひ、鞍を置き、鎧も許し、拍車も許された。學校として馬術の練習をやつたのは、五高が始だと思ふ。さるにても、是等の經費は、後にて聞けば圖書費の大部を振向けられたそうなる。その頃五高にも野球の一回があつた、併し器具と云へば、バットと、ボールと、シートだけで、マスクもミットも、驅當も銅もない。皆徒手、空拳で打つ、搦むので、随分危険であつた。云云

(元校長武藤虎太氏の「思ひ出草」)

尙、器械體操、柔術、擊劍、弓術等のことは、後に記すつもりである。

明治十九年の勅令第十五號中學校令第一條に明示されて居るやうに、高等中學校なるものは、『實業に就かんと欲し、又は高等の學校に入らんと欲する者に須要なる教育を施す所』であるとすれば、後年の高等學校の如く、殆ど凡てが大學に進むべき者に對する基礎教育の機關でなく、卒業の曉には、直ちに實業に就き得るやうに教育するためには、往時の實業専門學校に類する教育所たらしめることも亦、當然のことである。而してそれには、固より醫術のみに限らず、例へば、會て第三高等中學校に、法律・經濟・工學等が設けられたこともあるが、歴史的にも、又、必要上からも、醫術に關する醫學部を、先づ五つの高等中學校に附設するのは、自然の勢であつたと考へる。乃ち、文部省は、二十年八月二十七日付を以て、仙臺の第二には同地に、大阪の第三には岡山に、金澤の第四には同地に、熊本の第五には長崎に、東京の第一には、九月、千葉に、それぞれ醫學部を置いたのである。

第五の醫學部は、第二・第四と同じく、本校部のある熊本に設けても差支へなく、殊に、肥後藩の再春館は、本邦近世醫育機關の濫觴とも稱すべきにも拘らず、熊本醫學校を避けて、長崎醫學校跡に定めたのは、前述の通り、此の地が、吾が國の文明並に教育の歴史上、看過すべからざるものがあつたからであらう。而して我が醫學部に就いては、五十年史には、相當精しく記して置いたけれども、茲では一切省略することにした。



會 議 室	教 員 教務掛室	校 長	幹 事	庶 務 掛	小使寢室	會 計 掛	宿 直 間
		校長等應接室	教務掛		小使詰所		

關玄

龍南の五年

待望の煉瓦建の本館は、明治二十一年二月に工を起して、翌二十二年の八月には、早くもその竣成を見たので、去る二年前、假事務所を設けた日の、七月十三日を卜して、夏季休暇中、とりあへず、古城から龍南に假移轉を爲した。かくて、事務所は九月に、物理學實驗室は十一月に、化學實驗室は十二月に、竣工したが、廣袤亡慮^{びよ}五万一千餘坪の地域と、三百坪に垂んとする、堂堂たる二階建赤煉瓦の本館を始めとして、大小幾多の建物が立ち並び、而も現在と違つて、校域には、一本の大木もなく、附近にも亦、濟々饗や舊の熊本高等工業學校もなく、蒼蔚として翠綠を湛へて居る龍田山を背景として、目も鮮やかな赤煉瓦の本館は、眞に、九州における最高學府の名に相應はしく、熊本に於ける一偉觀ともなり、一名所ともなつた。寮歌「武夫原頭」の所謂「西海の一聖地」も、決して溢美ではなく、連日相踵いで來る參觀者の状態は、當時の「門衛日記」にも記されて居り、第五地方の各縣尋常中學校生徒の修學旅行も、最も近代的な龍南の大運動會の參觀を目標にして居たことが、記録に残つて居るのである。

殊に、九州鐵道は、その年の一月を以て、線路の實測を了へ、門司・遠賀川間、博多・久留米間、高瀬（今の玉名驛）・熊本間は、何れも同年七月に、久留米・高瀬間は、翌年七月に起工したが、高瀬・熊本間の竣工期限は、二十五年の六月になつて居ると云ふ有様で、運輸の不便や費用の節約からして、本校の東方、泰勝寺参道下に、焼場を拵へて煉瓦を製造し、建築用の櫟^{けい}二十五本は、球磨郡皆越村字八久保の官有林中、盜伐されたものを拂下げ、二百六十八圓餘—今の五十万圓以上に當る?—の運搬費を出してとりよせ、礎石その他の石材は、城西石神山方面に求め、基礎工事に使つた栗石は、近くの白川から運ばせたが、爲に石神の山容が變り、河原には、一時栗石がなくなつた、と當時働いた人達から、直接聞

いて驚いたくらゐである。

中にも、本館の基礎の如きは、九尺に九尺を掘り下げ、夥しい栗石を入れて固めたと云ふ。その結果は、假移轉の直後、七月二十八日午後十一時四十分につた劇震、翌日の稍強二十三回、輕震十四回、三十日の稍強五回、輕震十回、三十一日の稍強一回、輕震十二回、八月一日の稍強一回、輕震六回と、五日間に互る、當地方未曾有の大地震に、民家の倒壊、熊本市三十一戸、半潰十七戸、飽田郡の潰家百四十九戸、半潰百七十四戸、その他多數あり、熊本市の壓死三人、負傷五人、飽田郡の壓死十五人、負傷三十四人の外、人畜の死傷も少からず、明治天皇・皇后兩陛下よりも、多額の賜金があつたほどののに、本館には些かの損傷もなかつたことが、當時の官報にも出て居る。

星霜茲に七十年、その閒煉瓦の建物には、少しも手を加へないのに、本校を訪れる人とは、異口同音に、偶には洗ひ淨めるだらう、と言ふほど鮮やかでもあり、階段や戸窓の如き、最も動かされた部分に至るまで、少しの破損歪曲もなく、衛生保健の上からと云ふので、去る昭和十二年の夏（十時校長時代）に、取替へられた分厚な床板を一見しただけでも、老杉赤身の堅材に驚かされたものである。

——◇——◇——

かかる間に、野村校長は、同年九月三日、「^{備考}非職」を命ぜられ、教頭の西郷貞氏が、「校長事務取扱」を命ぜられたが、本校も翌年の一月には、寄宿舎が竣工したので、茲に漸やく完成を見るに至つた。而して新校移轉直後の職員は、教諭十人、囑託教員五人の外、會計主任まで二十五人となつたが、二月十四日には、平山太郎氏が、二代目の校長となり、十月十日を卜して、新校の開校式が行はれたのである。その頃になると、學校長の外、教授九人、幹事一人、助教授四人、書記三人、囑託員十人、雇員十一人、雇外國教師一人、計四十人となり、生徒は、前年十月三十一日調に依れば、豫科一級

十一人、同二級五十一人、同三級三十六人、補充一級六十八人、同二級、四十六人、計二百七十七人に増加して居る。

〔備考〕

野村校長は、明治二十年十二月にも、樹木寄附願を出して、茶・椿・梅等を寄附したが、二十一年より、生徒の修學旅行用及び戸外運動用の諸費として、年額金百圓宛の寄附を爲し、非職後も、四年間繼續して居ることが、官報に出て居る。又、高須碌郎氏と共に、生徒の戸外運動用として、乗馬一頭宛を寄附して居るのである。

因に、明治二十八年から三十三年まで、職員生徒及本校に縁故ある者を以て、栽樹會が組織され、二月十一日をトして、いろいろの樹木が栽ゑられたのであるが、その前後にも、卒業記念の植樹が行はれたことに云ふまでもない。序に、本校又は龍南會宛に、金品の寄附した人も多く、それ等は、五十年史に一括して置いた。

◇ — ◇

開校式日が、いよいよ二十三年十月十日に決定したのは、種種曲折を経た後の、九月二十二日のことである。何分にも、歴史的の行事で、その準備に忙殺されたことは、詳細な記録も残つて居る。例へば、わざわざ印刷局に注文した招待狀が、九月十日になつても來ないので、電報で照會し、學式の前日には、豫行演習までやると云ふ有様で、長崎の醫學部から、生徒八十人が列席するに就いても、電報の往復が頻繁であつたやうだ。而して開校式の模様には、十月二十七日の官報を引用する。

第五高等中學校ハ、熊本縣飽田郡黒髪村ノ新築工事竣功セルヲ以テ、十月十日、開校式ヲ舉グ、其次第八、當日午前十時、來賓參集シ、一同式場ニ入ル、次デ雅樂ヲ奏ス、次ニ生徒唱歌、次ニ文部四等技師久留正道、新築竣工ノ報告ヲ爲シ、次ニ學校長平山太郎演述、次ニ文部省専門學務局次長濱尾新演説、次ニ九州各縣知事總代熊本縣知事富岡敬明祝辭、次ニ熊本縣會議議長嘉悅信之祝辭、次ニ生徒總代本科第一部第一學年生徒木崎虎太（後、武藤と改姓、後の本校教授並に校

長、筆者註）祝辭ヲ述ブ、次ニ生徒唱歌、次ニ奏樂、右ニテ式ヲ了リ、來賓順次、校內各室及生徒ノ體操ヲ巡覽シ、次ニ一同會食、終テ競馬（有志者ノ寄附ニ系ル者）及生徒ノ遊技等アリ、午後六時、來賓悉ク散ズ、此日天氣晴朗、來賓ノ數三百四十八人、其他本校及醫學部職員、生徒共、計七百九十七人ナリ、其翌日ハ、公衆ニ校內ノ縱覽ヲ許セリ、云云平山校長の式辭中には、

然ルニ、世上或ハ都會ノ繁盛ニ眷戀シ、學校ヲ選ムニ方リ、此ニ捨テ彼ニ赴ク者ナキニ非ズ、誤レリト謂フベシ、諸君願ハクハ意ヲ玆ニ注ギ、苟モ少年子弟若クハ父兄ニシテ、此ノ如キ謬念ヲ抱ク人アラバ、懇々誨告シ、來リテ此ニ學ブ者アルモ、告ゲテ彼ニ遊ブ者ナカラシメ、益我固有ナル淳朴剛毅ノ氣風ヲ鞏固ニシテ、他日大ニ之ヲ擴張シテ、世ノ輕佻浮薄ノ風ヲ矯正スル基礎トナスノ覺悟アラフコトヲ

の一節もある。

濱尾次長の演述は、本文三千二百四十二字に及ぶものであるが、その中には、

抑各高等中學校卒業生ノ、直ニ分科大學ニ入學スルコトヲ得ベキ、分科大學規程中ニモ明記スル所ニシテ、既ニ客年始メテ、第三及第四高等中學校ヨリ、數名ノ入學アリ、其入學後ノ成績モ、概シテ劣等ナラズ、而シテ第二高等中學校及第五高等中學校即チ本校ニハ、本年始メテ本科ニ進ミタル者數名アリテ、今後二年ヲ經、各校俱ニ續々卒業生ヲ出スニ至ラバ、其志望ニ應ジ、皆均シク大學ニ入ルコトヲ得、以テ各高等中學校ト大學トノ連絡ヲ完フスルニ至ルベシ、然ルニ、世人或ハ、大學ニ入ルニハ、必ズ第一高等中學校を經由セザルベカラズト思惟スルモノアルハ、其事實ヲ知ラザルモノニシテ、謬見ニ過ギズ、切ニ望ム、大學ニ入ラント欲スル青年子弟ヨ、此謬見ニ惑フコトナク、便宜其地方ノ高等中學校ニ於テ、高等ナル普通教育ヲ受ケ、豫修ヲ完フシ、其目的ヲ達センコトヲ、

と諭すところもあつた。

而して新校開校當時に在りては、本校も、既に一部・二部の區別も立ち、尋常中學校の優等卒業生には、成績に據り、本科へ一人、同二年へ三人、豫科一年へ十六人、同二級へ一人、同三級へ二人、凡て無試験入學を許して居るが、成績の次第に基づいて、或は本科一年へ、或は豫科三級へと、可なり大きな段階を設けて居ることも、隔世の感があるけれども、それに従つて入學したのは、興味ある現象ではあるまいか。

翌二十四年九月にも、豫科一級へ二十六人、同二級へ十六人、同三級へ二人を、二十五年にも、豫科一級へ三十六人、同二級へ十七人を、二十六年にも、豫科一級へ二十四人、同二級へ二十八人、同三級へ一人を、二十七年九月にも、大學豫科三年へ十七人、同二年へ二十八人、同一年へ百三十三人を、それぞれ無試験で入學として居るが、それは、尋常中學校の教育が、次第に進歩して來たことを物語るものであらう。

◇ — ◇ — ◇

二十三年度の入學試験に關して、九月五日の揭示には、

- 一、習字科(漢) ニハ筆墨及硯ヲ携フベシ
- 一、習字科(英) ニハペン及インキヲ携フベシ
- 一、體操科ニハ和服ヲ許サズ

但シ洋服持合せナキ者ハ筒袖肌着股引ヲ代用スルコトヲ得

とあるのも面白い。殊に、はだきやもひきなどは、今の青年子弟は、語すら知らないであらう。

同十日の揭示に依つて、その年の教科書を擧げてみれば、

補充第二級(最下級)には、

國語、漢文(和文讀本、日本外史)、英語(ロングマン氏第三讀本、同第四讀本)、歴史(神保氏小學日本歴史)、數學(寺尾氏算術教科書、菊池氏幾何教科書)

補充第一級には、

國語、漢文(和文讀本、三島氏初學文章軌範)、英語(ロングマン氏第四讀本、スウキンソン氏萬國史)、歴史(フレマン氏小歐羅巴史)、數學(寺尾氏算術教科書、菊池氏幾何教科書、スミス氏代數初步)、物理學(スチウワート氏サインスブライマー(参考))、化學(ロスコー氏サインスブライマー(参考))

豫科第三級には、

國語、漢文(文章軌範、謝選拾遺)、英語(スマイルス氏セルフ・ヘルプ、マコーレー氏ライフ・オフ・クライブ、スウキンソン氏大文法書)、數學(スミス氏大代數書、ウキルソン氏平面幾何學)

豫科第二級には、

國語、漢文(謝選拾遺、八大家文)、英語(ジョンソン氏ヒストリ・オフ・ラセラス、マコーレー氏フレデリック・グレート・スウキンソン氏大文法書)、數學(スミス氏大代數學、ウキルソン氏立體幾何)、化學(ストウレル氏化學書(参考))

豫科第一級には、

國語、及漢文(八大家文、史記傳抄)、英語(ゴルドスミス氏ウイカー・オフ・ウエークヒールド、一種未定)、獨語(ヘステル氏第一第二讀本、フフハイム氏第一讀本、エンゲリエン氏第二讀本、コンホルト氏文法書)、歴史(フィ

セル氏大萬國史)、數學(トドハンター氏平面三角法)、物理(スチウワード氏物理書(参考))
本科第一部第一年には、

國語、漢文(竹取物語、土佐日記、韓非子、左傳)、英語(未定)、獨語(ウエベル氏萬國史、セーヘル氏文法書)、
歴史(スチウデントセリーズ各國史)、哲學(ジエボン氏論理學)

本科二部第一年には、

英語(不詳)、獨語(ウエベル氏萬國史、セーヘル氏文法書)、數學(バックル氏平面解析幾何、バンザイド氏方程式論)、
式論)、化學(ロスコー氏化學(参考書))、測量(キレスビー氏測量學)、圖畫(ワレーン氏投影畫法)

となつて居るが、その中、スミス代數書、トドハンター氏平面三角法、バックル氏解析幾何、バンザイド氏方程式論、ワ
ーレン氏投影畫法、韓非子、左傳、ジエボン氏論理學、フイセル氏萬國史、ウエベル氏萬國史、スウキンソン氏英文法書
などは、已むを得ない事情ある者に限り、規則に従つて、貸付けたもので、その貸付簿の一部は、五十年史に寫眞にして
おいた通りである。



五十年史を繕いて見ると、その一六七頁に、私は、次のように書いて居る。

我が校の寶物は何かと問はれたならば、誰しも言下に、御宸署の勅語並に「瑞邦」「濟美」の御額だと答へるに相違な
い。又、準校寶とも稱すべきものには、竣功間もない頃の寫眞、勝海舟翁の額、嘉納校長の額、ヘルン氏の試験問題、
夏目教授の祝辭等であらうか。

右の勅語に就いては、當時の國情や、二十三年十月三十日煥發の直後、十一月二十三日、元の新嘗祭日の奉讀式、二十四

年一月二十二日、平山校長の奉携歸校、五十年史編纂の頃、校長室に掲げてあつた勅語の大額の由來、秋月教授の「勅語
演説」、並に中川校長の序・木村弦雄の跋、秋月翁辭任の際に贈つた「山高水長集」や「鎮西餘響」等、十頁に亘つて縷
説して置いた。

又、龍南人に取つて、忘れ難いものの中には、瑞邦館と濟美館がある。「瑞邦」の二字は、嘉納校長が、龍南會の爲に、
有栖川宮一品親王殿下に揮毫を願つて掲げたもので、海舟の「入神致用」も、當時のものである。「濟美」の二字は、参
謀總長小松宮彰仁親王殿下が、次の中川校長の懇請を容れて、揮毫されたもので、三十一年六月、初め、瑞邦館に掲げ、
雨天體操場に、後更に、柔劍道場に移され、嘉納校長の「順道制勝行不害人」の八字も、永い間柔道場に掲げられて居た
ものである。

ヘルン氏の試験問題は、五十年史編纂の當初、雜然と堆積された無數の資料の中から、全く偶然に私が發見したもので
ある。實に見事な筆蹟ではあるが、日本人離れがして居ることに注意しただけで、まさかヘルン氏の眞蹟とは、知らな
かつた。然るに、幸にして、當時の生徒であつた十時校長が一見して、それと確認したものである。一八九三年、明治二十
六年の卒業期即ち本科二年、四次即ち本科一年、及、豫科一・二年に課したもので、本科には英文文、豫科には會話と
なつて居り、その他、法科及文科の生徒に課した、英文羅譯、羅文英譯の問題も添へてあり、該問題紙には、御丁寧にも
櫻井校長と佐久間(信恭)教授の認印まで押してある。而してそれは、二十七年十二月三十日を以て、本校を去つた前年
に當る。五十年史には、その一部を寫眞にしたが、茲には轉載して參考に供する。

夏目教授の「祝辭」には、「明治三十年十月十日 第五高等學校教員總代 教授夏目金之助」と記されて居る。行文筆
致ともに、二松學舎(今の大學の前身)の三島中洲の直門だけあつて、漱石全集中の藏書目錄や、漢詩集を一見しただけ

でも、その片影がしのばれ、後年の文豪漱石三十歳(1867—1916)の天分が、餘蘊なく發揮されて居るばかりでなく、日清戦勝後に於ける、世相並に龍南人への鍼砭と観るべきであらう。この一篇は、岩波書店刊行の初版全集には輯録されて居ないが、先年、寡夫人が森田草平等と共に來校、撮影したこともある。五十年史には、ヘルン氏と同じく寫眞にしたが、この度は、全文を筆録して置く。

註

正則の方では英語をやらなかつたから卒業して後更に英語を勉強しなければ豫備門へは入れなかつたのである。面白くもないし、二三年で僕は此中學を止めて了つて、三島中洲先生の二松學舎へ轉じたのであるが、……元來僕は漢學が好きで随分興味を有つて漢籍は澤山讀んだものである。今は英文學などをやつて居るが、其頃は英語と來ては大嫌ひで、手に取るのも厭な氣がした。……其處で僕も大いに發心して大學豫備門へ入る爲に成立學舎……へ入學して、殆ど一年許り一生懸命に英語を勉強した。

(明治三十九年七月「中學生時代」)

ヘルン氏のものは、直ちに庶務課の金庫に藏つてもらつたので事無きを得たが、それと前後して探し出した、夏目教授の試験問題は、謄寫刷りではあつたが、編輯室の書棚の中に、符簽をしておいたばかりに、何時の閒にか、誰かがそれを抜き取つてしまつた。夏目教授は、ヘルン氏が去つた翌翌年、即ち二十九年四月十四日の發令で講師、七月九日、教授となり、三十三年五月十二日付、英國留學、三十六年一月二十一日「歸省」、三十六年三月三十一日退官まで、實際は四年餘でも、辭令の上では、七年近くも勤めて居たのだから、専門に關するものが、せめて一つくらゐ遺つて居てもいいものなのに、全く惜しいことをしたものだ。(習學寮史に、「猫」の多々良三平云に就いて、「これはたしか明治三十九年九月頃の事である。」と書いて居るのは、「猫」は、三十八年一月一日から、三十九年八月一日までの作であるが、作中の人物とは、たしかに十年のずれがあるのである。)

〔参考〕

English Composition.

I

Theme for Graduating Class of 1893:—

—Carlyle, having been asked by a student;—"what shall I read?"—made answer,—"Read that which is eternal." Comment upon this incident; and write your own opinion as to what is "eternal" in good books,—considering the word "eternal" as refering only to the whole history of human civilization, and its probable future.

II

Theme for Fourth-year Class (Eng. II.):—

"The Story of Tithonus,"—as recited by the teacher.

III

Theme for Preparatory Class, P. I. A. & P. I. B.

"The story of the Man who Lived for a thousand years,"—as recited by the teacher.

IV

Theme for Preparatory Class P. 2. A. & P. 2. B.

—The Story of the three Caskets in Shakespeare's "Merchant of Venice,"—as recited by the teacher. (Caskets)

English Conversation Class.

—Subject of Conversation in the Annual

Examination of 1893:—

Abstract and Common Nouns.

Class P. I. A.—

" P. I. B.—

Notice.—Answer to questions must be given immediately.

[According to the questions asked by the teacher, each pupil will make a statement in which some abstract or "material" noun will be changed into a common noun by particularization, (or "limitation",—and vice versa.)]

Class P. 2. A.

" P. 2. B.

Notice.—Answer to questions must be given immediately. But should any fail to answer, the teacher may give them a second chance, if time allows.

I:—Common Conversational idioms. II:—Preposition of Time and Place.

[The teacher will ask each student in turn a question of which the answer will require the use of a familiar idiom.—Or, at option, he may ask questions, of which the answers will require the correct use of prepositions relating to Place or Time.]

Latin Examination.

(省 略)

〔備考〕

祝 辭

本日本校創業ノ記念日ニ當リ我等モ聊カ所感ヲ述ベ并ニ諸子ニ告ゲ以テ今日ノ祝詞トセム夫レ教育ハ建國ノ基礎ニシテ師弟ノ和熟ハ育英ノ大本タリ師ノ弟子ヲ遇スルヲ路人ノ如ク弟子ノ師ヲ視ルヲ秦越ノ如クンバ教育全ク絶エテ國家ノ元氣沮喪セム諸子笈ヲ負テ斯校ニ遊フ必ス當ニ校舎ヲ以テ吾家トナスノ覺悟アルヘキナリ若然ラスノ放逸喧擾妄ニ校紀ヲ紊亂セバ我其心ト學校トノ間白雲千里ナルヲ見ル而已夫レ天人一體自他無別ト言ヘリ斯クナラデハ學校ノ隆盛ハ期シガタキソカシサレバ此記念日モ往シ昔ノ忘形見ニノ一日ノ歡樂ヲ盡スモ益此ノ校ヲ光大ニシ皇恩ニ報イ奉ラントテナリ況テヤ國家岌々ノ時ナリ濫費ノ日ニ多キハ内憂ナリ強國ノ隙ヲ窺フハ外患ナリ思テ茲ニ至レハ寢食モ安カラヌヲナリ殊ニ薄志弱行ノ徒ハ人ノ色ヲ見テ移リ利ノ多少ヲ聞テ走ル恰浮雲ノ如シ豈浩歎ノ限ナラスヤ諸子能ク此ニ眼ヲ着テ規則遵奉校友相和シ孜々トシテ學ヲ勉メバ唯本校ノ面目ナルノミナラズ亦國家ノ幸福ナリ諸子今學生タリト雖凡其一言一動ハ即國家ノ全局ニ影響スルナリ佐久間象山我四十二ノ斯身ノ天下ニ關スルヲ知ルトイヘリ象山ノ人傑ニゾ始テ然ルニアラズ中等ノ人士モ然リ下等ノ匹夫匹婦モ亦然リ則チ學校一致ノ觀念ナキハ其校全體ノ破綻ニゾ亦國家教育ノ陵夷ナリ懼テ戒メザルヘキンヤ是ヲ祝規トス諸子之ヲ諒セヨ

明治三十年十月十日

第五高等學校教員總代

教授 夏目金之助(原文のまま)



閑話休題。平山校長は、着任の年に、新校の開校式や、勅語の奉安などの大任を果し、二十四年六月八(二)日(作)を以て逝去(花岡山の三本松に於て、金生健翁刻して盛歟)。同年八月十三日付を以て、文部省参事官のまま、而立(じりつ)の獨身の颯爽たる嘉納校長の新任を見たのである。後年は日本の、今日は世界の嘉納先生となつて居るだけ、その任期は、二十六年一月二十五日まで、僅かに一年五箇月に過ぎなかつたけれども、その足跡は洵に大であつた。即ち、後に記すやうに、龍南會も、着任直後に出來た。その翌年には、本校第一回の卒業式も行つた。職員中には、その前年以來の秋月老教授があり、同年十一月には、三十六歳の



中央は嘉納校長・その右は秋月教授・左はハーン氏
(明治二十六年二月三日の送別寫眞より)

ヘルン氏(1856—1904)も招聘した。而してその翌二十五年三月七日には、醫學部の開校式にも臨んだ。六月八日には、花岡山に於て、平山前校長の一年祭も行つた。七月十一日には、第一回の卒業式も舉げた。

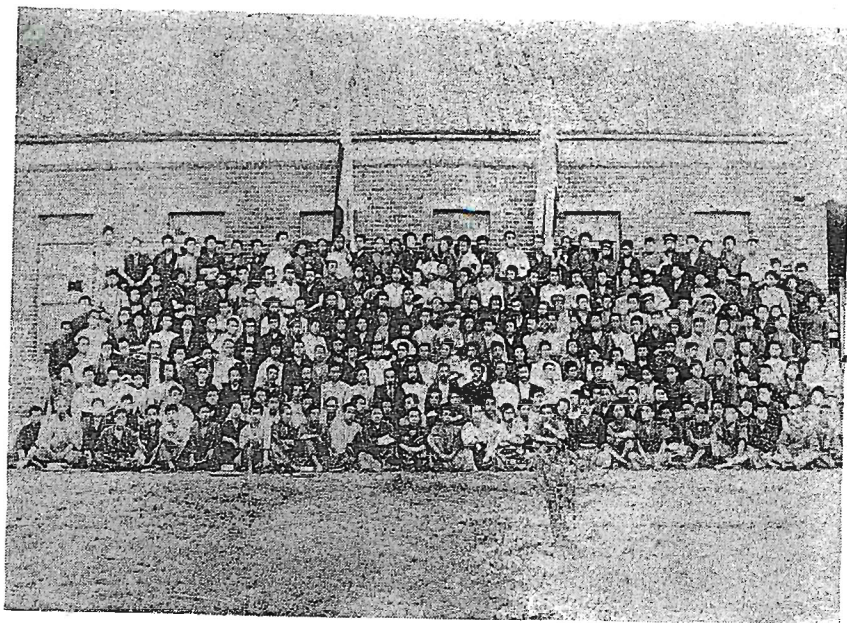
註

—You would like Mr. Kano extremely, I am sure. He is very different from most Japanese teachers I have met. His nature is extremely sympathetic and also extremely frank—something almost peculiar to strong personalities. Having met him once, you feel as if you had known him for years'.

(Ichikawa: Some New Letters & Writings, p. 23—河原畑教授の「八雲と五高——その「three years' experience of discomfort」に就いて——」より)

〔備考〕

第五高等中學校にては、今度授業時間外を以て、生徒の希望に應じ柔術を練習し、道場には生徒控所四十疊敷を修理して之に充て、嘉納校長及その高弟



第一回卒業記念
(前より三列目、中央和服姿は嘉納校長、左二人目は秋月教授
その後列十四名は卒業生)

肝屬氏教導の住に當れり。又弓術の如きは從來も練習中なりしが、大雨のため道場破壊せし故、一時中絶せしが、今度これをも再興し、國哲雄氏之が師範となり、擊劍は和田傳氏既に初夏の頃より教授し來りしが、今又一層之を盛んにせり。今や駿馬秋に嘶き、征鵬空に横はるの時、試みに一たび高等中學の門に入る時は、弓弦の聲は竹刀の響に應じ、氣壯、神躍殆んど懦夫をして立たしむるの概あり。盛んなる哉。(明治二十四年十一月五日、九州日日新聞、習學寮史所載)

創業の際、遠大なる抱負を懷いて、豫科三級に入學した二十四名並に六十一名の假入學者中、學業に、運動に、將又、龍南會の設立に、不斷の努力を傾けることと五星霜、茲に首尾よく其の業を了へた、一部法科生四名、同文科生二名、二部工科生五名、同理科生三名、凡て十四名に對する、晴れの第一回卒業式は、二十五年七月十一日の午前九時、雨天體操場、即ち、後年の濟美館に於て舉行された。僅か十四名に過ぎなかつた

が、熊本縣知事や第六師團長までも、祝辭を朗讀するなど、送られる人人も、送る人人も、感慨無量であつたに相違ない。又、生徒間に於ても、七月五日、今の公會堂に當る、新町の「忘吾會」に於て、三百餘名の出席の下に、いとも盛大な送別會が催された。龍南會が発足すると、委員長となり、常に在校生の中心として活躍を續けて居た藤本充安氏の答辭には、吾人は、他の刺激によりて興奮せるにあらず、只吾人が赤誠よりして、無形の第五高等中學を建設したりき、即ち、本校を以て單に監督者のみの學校とは見做さざりしなり、吾人が、明治廿年开始て本校に入るや、一小破屋の内にありて、現今の如き宏壯美麗なる煉瓦の如きは、夢にだも見ることは能はざりき、假令學校は、此の如く汚穢狹隘なりしにもせよ、吾人は、確かに精神を有し(原、う)たりしなり、(中略)現今域に及ぶ迄經歷せる事項を舉ぐれば、

(一)學團の編成 (二)體育會の創設 (三)福井先生の離別 (四)飯田舎監の訣別 (五)土曜會の開設 (六)開校式に於ける醫學部との親交會 (七)招魂祭への寄附 (八)擊劍會及柔術會の設置 (九)自炊制度 (十)龍南會の開會(中略)

吾人若し監理者によりて、此等の事業を完ふするを得たりとせば、監理者の變化は、一々影響を吾人に及ぼすべき筈なり、然るに、實際之が變化を見たることなきより見れば、固より生徒一己の力なりしや知るべし、云云(二四、九、二)

○龍南會雜誌)

とある。當時を想見すべきであらう。

註 土曜會は、後の演說部である。筆者

運動競技に就いては、既に一言したが、精神的方面に於ても、古城時代、補充科生の間に行はれて居た「金蘭會」の「同覽雜誌」、それに刺激されて起つた「研志會雜誌」等があり、後には、「龍南叢誌」などの私的回覽雜誌も現れると云

ふ有様で、文に武に、漸次充實されつつあつたのである。

かくて、潑刺たる青春の意氣と和親とは、遂に二十四年十一月三日、天長節の佳辰を卜して、嘉納校長を會長とし、雑誌部・演説部・撃剣部・柔道部・弓術部・戶外遊戯部から成る、総合的な校友會を出現させた。爲に、創立以來の懸案は解決され、宿望は達成されたのである。而してその校友會の名稱に就いては、種種の意見も出たやうだが、山南水北を陽と謂ふ、の古語に因んで、「龍陽」の二字を選び、秋月教授に蒙を啓かれて、遂に「龍南」と決定したことは、龍南會雑誌にも記されて居り、又、よく話題にもなつて居る。

既にして發會新興の餘力は、逸早く同月二十六日を以て、「龍南會雑誌」を創刊するに至つたが、撓ゆまざる委員の努力と、惜まざる教官の支援と、兩兩相俟つて毎號豊富なる内容を備へ、龍南人に歡迎愛讀されたのである。

——◇——◇——

嘉納校長は、瑞邦館に於て、柔道の指導は勿論、時には親しく修身の講話も爲し、又、秋月老教授の修身講話の際は、生徒と共に傾聴するほどの謙虚さもあつたと云ふ。而してその去るに臨んでは、二月三日、錦山社頭に於て、全校の送別記念の寫眞を撮つて居る。以てその信望を察すべく、ハーン氏がその翌年、龍南を去つた主な原因の一つでもあつたらしう。

かくて、二十六年一月二十五日付を以て、第四高等中學校長中川元氏がその後任となつた。シカゴに於けるコンプス博展會へ、本校の建築圖や、醫學部より妊娠後四週間の人體、肝臓デストマ蟲卵その他を出品したのも此の年である。尙、前後十三日に互る長期の行軍その他、記すべき事もあるが、第五高等學校の名稱は、日清戰爭の開始と年を同じうするので、次の「高校前期」に述べることにした。

